

聖所からの光



下巻

THE LIGHT FROM THE SANCTUARY NO.2

聖所からの光

下巻

第三部

～聖所の研究～

1. 歴史的
2. キリスト論
3. クリスチャン経験

実体



「神よ、あなたの道は聖所にあり」詩篇 77:13 欽定訳

詩篇記者は「神よあなたの道（方法）は聖所にあり」（詩編 77：13）と言っています。聖所は聖書の大真理を明瞭にしています。

E V 221 頁に「天の聖所の奉仕の正しい理解が我々の信仰の土台である」と言われています。

大争闘下 222 頁には「天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものである。…それは何よりも重要なことである」と神は言っておられます。だから「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕らえ、我々が最もよく知っていなければならない働きそのものについて、我々に考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる」。それに「万事がかかっていることを、彼は知っているのである。」大争闘下 221

「万事」というと、我々の品性の完成も、世界伝道の完成も、大いなる悩みに備えることも、キリストの再臨を迎える準備も、「万事がかかっている」のです。そうであるなら、これほど重要な真理はないのではないのでしょうか。

イスラエルの民が聖所を中心に配置されていたように、「天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものです」（大争闘下 222）。我々神の民は救い主イエスのおられる天の聖所に心を向けて最後の時に生き、働かねば

ならないのです（ヘブル 6:20、4:16）。イエスは今ここで、何をしておられるのでしょうか。現在のイエスの立場と働きを理解しなければどうなるでしょう。

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる。」大争闘下 222

つまり、我々は至聖所におけるイエスの立場と働きを理解しないと、まず第一に、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、第二に、セブンスデー・アドベンチストでなければならないという立場、アイデンティティー（独自性）も見失ってしまうというのです。第七日安息日を守る団体は 500 もあるといわれています。唯一、セブンスデー・アドベンチストがキリスト教界に貢献している教理は、至聖所における「最後の贖い」の教理です。

我が教会において幾つかの輝かしい星、すなわち指導者たちが背教していった主な理由はここにあったのです。再臨信仰の大黒柱である、聖所の問題、ダニエル書 8:14 の聖所の清め、最後のあがないについての疑いと証しの書に対する疑いが根本的な原因のようです。

図 37



十字架とその影

図 37 の説明

聖所の「全体系は福音がぎっしり詰まった預言」であり「真理の全体系を明らかにして」います。(患難から栄光へ上 6、大争闘下 138 参照)

聖所のすべては十字架の影であり、福音の影です(ヘブル 10:1)。幕屋の中の器具の配置は十字架のパターンになっていますね。地上の聖所は天の聖所の影、模型であります。

大争闘下 222 頁に「天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものである。…そこには、カルバリーの十字架からの光が反映している」と書かれています。

十字架は、天の聖所の中心であります。十字架で世の罪を取り除く神の小羊の血が流され、流された血を注ぐために、聖所で大祭司による仲保—執り成しの働きがなされなければなりません。でなければ、罪のゆるしも、罪の清めも、罪の除去もなされません。贖いは、ほふられる小羊と全能者の仲保の働きによることを知る必要があります。聖所に「真理の全体系」を見ることができのです。この二つの事

実によって人類は罪から解放され、元の状態に回復されるのです。これがまさに「福音」であります。

祭壇、すなわち十字架で流された血だけが福音ではありません。流された血をもって聖所で大祭司が仲保の働きをなさることも福音であります。

福音とは？

パウロによると福音とは、「ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力で」あります。ローマ人への手紙 1:1

何からの救いでしょうか？ マタイによる福音書 1:21 に、「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろろの罪から救う者となるからである」と書いています。

黙示録 1:5 によると、「罪から解放」するのです。それは、「信仰の従順」です(ローマ 1:5、16:25)。つまり、罪からの解放、神の律法への従順=服従に至らせるのが福音であります。それ以外は偽者の福音です。

図 38



生きて主を迎える 聖徒達の経験

「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。」初代文集414

三天使の使命



図 38 の説明

地球最後の使命—「三重の使命」は、「永遠の福音」と言われています。

ヨハネの黙示録 14:6-12 にそれを見ることができます：

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』。

14:8 また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』。

14:9 ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、

14:10 神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

14:11 その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、

そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。

14:12 ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある。』

神は、完全にご自身の律法と調和し、罪から完全に解放された民を出現させるご計画を持っておられます。

ヘブル人への手紙 6：1 「そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教の初歩をあとにして、完成を旨として進もうではないか。」

ヘブル人への手紙 6：19 「この望みは、わたしたちにとって、いわば、魂を安全にし不動にする錨であり、かつ『幕の内』にはいり行かせるものである。」

※ 最近のプロテスタントとカトリックの共同作業であり、合同運動を目的として作られたている聖書はここを「至聖所の幕の内」としています。つまり、イエスが昇天してすぐ至聖所に入られたとすることによって、セブンスデー・アドベンチストの 1844 年に聖所から至聖所に入られたとする再臨運動の基礎を揺るがすことになるのです。

図 39

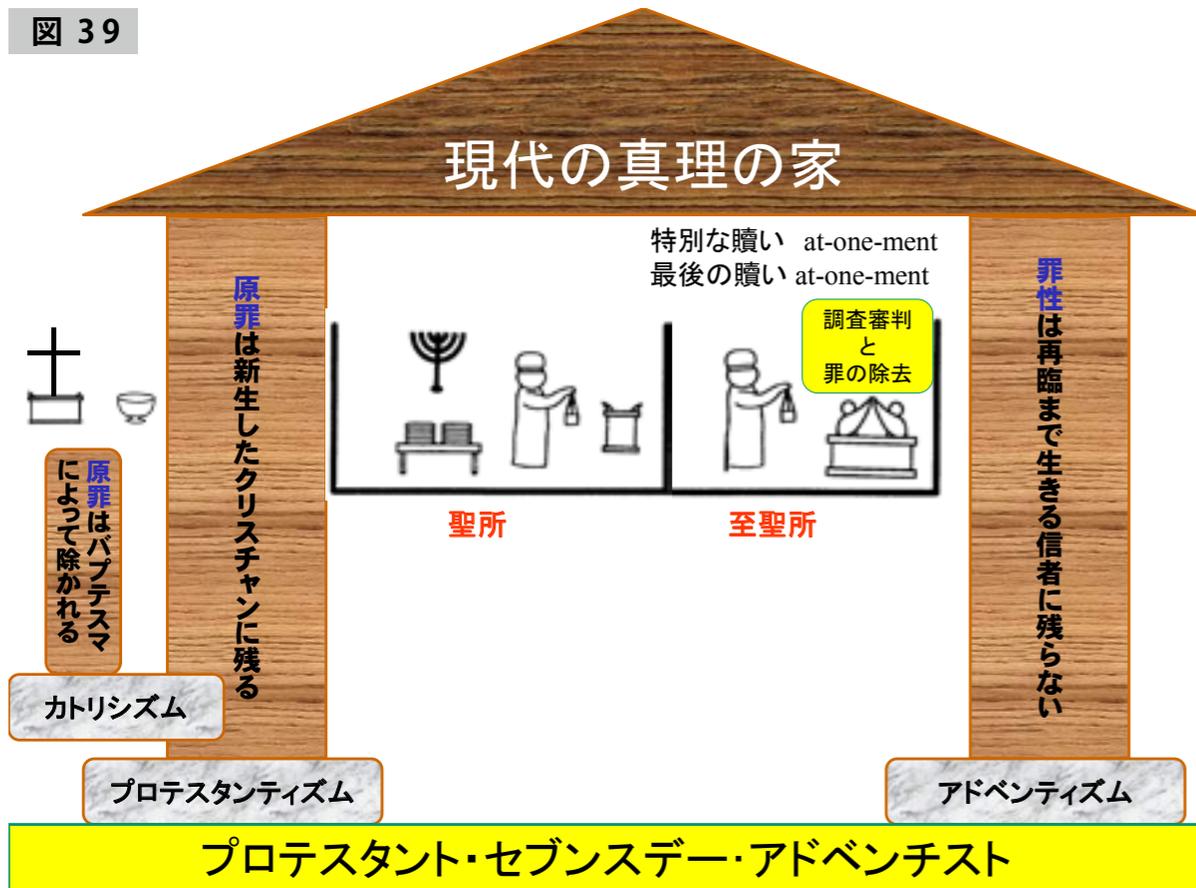


図 39 の説明

神は各時代、「現代の真理」を送られます。(2ペテロ 1:12 英語欽定訳)

さて、これから**現代の真理**を説明します。

「この時代に与えられるべきメッセージは何でしょうか。それは**第三天使のメッセージ**です。しかし、全世界をその栄光で満たすべきこの光が、現代の真理を信じていると主張しているある人々によって、さげすまれてきました。」聖霊に導かれて 104

「群れが今必要としているのは、『現代の真理』である。わたしは、使命者たちが、現代の真理の重要点を離れて、群れを一致させ魂を清めるのになんの役にもたない問題を、長々と話す危険を見た。」初代文集 137

「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返した時に、天の聖所を

指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。」初代文集 414

なぜ、「至聖所」なのでしょう？

イエス・キリストは今は、天の聖所の最終の働きをするために、「至聖所」におられるからです。そのことについては、追って詳しく研究します。

至聖所における最後の贖いは、罪を信者の心から完全に除去し、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を」(エペソ 5:27) キリストの再臨に備えます。罪なき完全な 144,000 を出現させるのです。(黙示録 7 章、14 章を参照)

図 40

ダニエル書 8, 9 章の大預言

「聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。」 大争闘下139

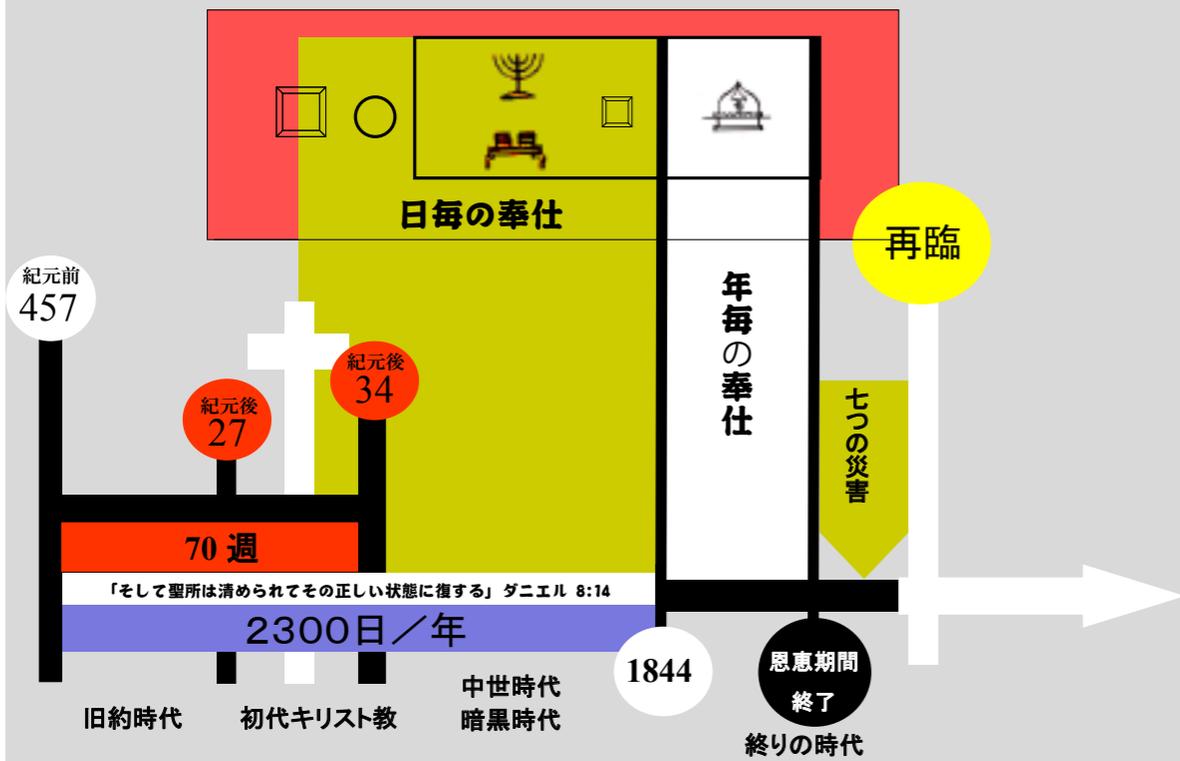


図 40 の説明

1. 歴史的研究

では、どのように罪は処理されるのでしょうか？ その方法は聖所にあります。

さて、聖所の研究をする方法に3つあります。

(1) 一つは**歴史的な面**から見ること、(2) 二つ目は**キリスト論の面**から、(3) 三つ目は**体験的な面**から研究します。

1. 歴史的研究

まず、聖所の真理を歴史的な面から見てみましょう。そうすることによってセブンスデー・アドベンチストという教会は、聖書に預言されていた教会、最後の真の教会であるという確信を持つことができます。

イエス・キリストは復活されて、「新しい契約の仲保者として」天の聖所での奉仕を開始されました(ヘブル 9:15、8:1,24:15)。使徒たちは、「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」(テモ

テへの第一 2:5) と証言しました。

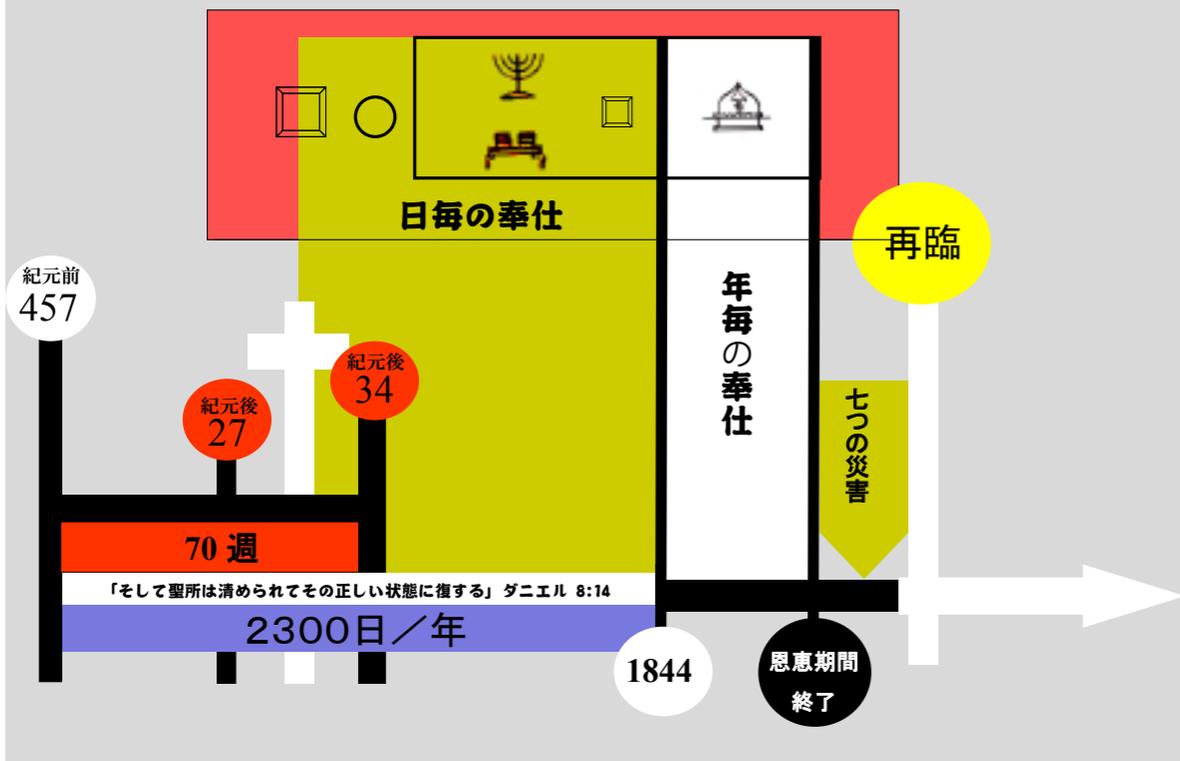
ところが、中世時代にローマ法王教は、人間の司祭、仲保者を立てて神と人間の間に立ちはだからせ、罪のゆるしを宣言するという僭越なことをしました。

宗教改革者たちは、聖書の福音によって法王教と戦い、プロテスタント(抗議する者たち)と呼ばれるようになりました。

やがて 19 世紀の半ばに再臨運動が起こります。それは、ダニエル書 8:14 節の「**二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する。**」という預言の解き明かしから生まれたものでありました。1844 年 10 月 22 日にキリストの再臨があることを期待したのですが再臨がなかったので、大失望を経験します。しかし、「小さい巻物」ダニエル書の研究がそんな経験へと導くことも、実は聖書に預言されていたのですから驚くべきではありませんか？ 黙示録 10 章の預言の成就でありました。彼らは、新しい契約の聖所が天にあり、2300 年の聖書で最も長い預言の時が来たことを知りました。

ダニエル書 8, 9 章の大預言

「聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。」 大争闘下 139



セブンスデー・アドベンチスト教会は聖書解釈の意見の相違で分派した教会ではありません。その誕生も、ラオデキア状態に陥ることも、そして覚醒も預言されていたのです。

この研究で、セブンスデー・アドベンチストはどこから、どのように誕生したか、現在どうしているのか、今後どうなっていくのかを見ることができます。

「聖所からの光が、過去と現在と未来を照らした。」 大争闘下 139

聖所について詳細は、各時代の 大争闘下 巻の第 23 章に書いてあります。

昔の聖所は福音の新約時代のタイプであります。

「聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱は『2300 の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する (ダニエル 8:14)』という宣言であった」 大争闘下 119。

ダニエル書 8, 9 章の大預言によるとキリストは、ダニエル書 9 章の 70 週の預言の最後の 1 週の半ばに、すなわち紀元 31 AD に十字架にかけられるはずでありました。チャートを見てください。十字架は外庭の祭壇の下に来ています。犠牲の小羊は世の罪を取り除く神の小羊イエスでありました。十字架の死の後キリストは復活して天の聖所に入られて、とりなしの働きを開始されました。ですから、十字架から 1844 年まで実体では、日毎の奉仕、キリストのとりなしの働きがなされたのです。ダニエル 8:14 によると、イエスは 1844 年に至聖所 (第 2 の部屋) に入られました。それは年毎の、1 年に 1 度の大祭司の働きで表されていたように、最後の特別な働きをなさるためでありました。このように新約の実体でも、日毎の奉仕、年毎の奉仕のように明らかに 2 つに分けられています。天の聖所の第 2 の部屋の働きを終えられると、その後イエスは罪を処理なさるためではなく、ご自分の民を救うためになるのです (ヘブル 9:28)。すなわちキリストの再臨です。70 週の驚くべき預言の成就是、次頁で簡単に説明します。

図 42



70週の預言—ダニエル書9:24-27

詳しくは、大争闘下12-16

図 42 の説明

1. 歴史的研究

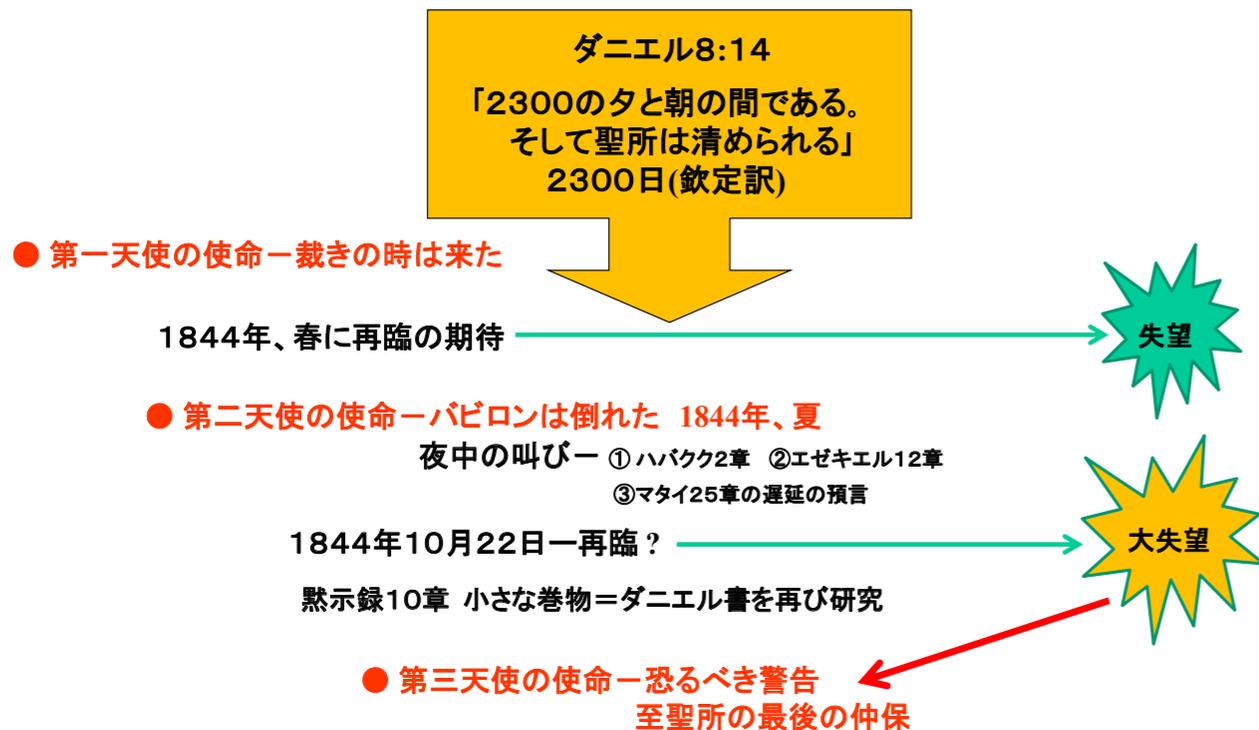
ダニエル書 8:14—2300年の預言とダニエル書 9:24-27の70週の預言の説明

大争闘下 9-15 参照

- 預言の期間の計算 1日=1年 民数記 14:34、エゼキエル 4:6
- ダニエル 9:24-27の預言に当てはめてみたら驚くほど正確に成就した。
- 70週の預言は、ユダヤ人とイエスの初臨に関する預言。
- アルタシャスタ王のエルサレム再建命令が起算点。エズラ 7:7 —紀元前 457B.C.
- 7週の終わりにエルサレム再建完了
- 62週の終わり、すなわち紀元 27年にイエス、バプテスマを受けられる。使徒行伝 10:38、ルカ 4:18、マルコ 1:14,154。「キリスト」とは油注がれるの意。

- 最後の1週(7年)ちょうど真ん中の紀元 31年に十字架につけられる。
- 70週の最後、紀元 34年にステパノ殉教。ユダヤ民族の恩恵期間の終了。使徒たちは異邦人伝道を開始。
- 70週が「定められています」と訳された言葉は字義どおりには「切り取る」の意。
何から「切り取る」のだろうか? 2300日/年の預言から切り取られた。
- 70週の預言も2300年の預言も起算点は同じ。「エルサレム再建」、紀元前 457B.C.
- 70週の終わり、紀元 34年から残り 1810年は紀元 1844年。
- エルサレム再建命令は秋に出た。従って 1844年の秋に聖所の清めが始まることになる。

セブンスデー・アドベンチストはどのようにして生まれたか？



セブンスデー・アドベンチストはどのようにして生まれたかを見てください。

- ・ダニエル8:14の「二千三百の夕と朝(日)の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。
- ・聖所(地上)を清めるために、キリストは再臨なさると信じ、1843年からウィリアム・ミラーは、「神を畏れ、神に栄光を帰せよ、神の裁きの時は来た」と全米にわたって第一天使の使命を述べ伝えた。
- ・1844年の春にイエスは再臨なさらなかったで失望を味わう。
- ・1844年の夏、失望しないで神の誠実を信じて、なお預言の研究をつづけた人々は、キリストの再臨が遅れることを、マタイ25章の10人の乙女のたとえ、またハバクク2:3に見た。



「花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた」(マタイ

25:5-7)。最初、2300日が終わると考えられた時と、後に、それが延長していると考えられた同年の秋との、その中間の1844年の夏に、ちょうど聖書の言葉どおり、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」という使命が伝えられた。

この運動が起きたのは、2300日の起算点であるところの、エルサレムを建て直せというアルタシャスタ王の勅令は、紀元前457年の秋に効力を発したのであって、以前に信じられていたように、その年の初めではなかったということが、発見されたからであった。457年の秋から数えれば、2300年は、1844年の秋に完了する(図42参照)。

また、旧約聖書の型から見ても、「聖所の清め」によって表わされている事件が起こるのは、秋であることが示されていた。これは、キリストの初臨に関する型が成就した方法に注目した時、非常に明瞭となった。」大争闘下 104-105

- ・1844年、キリストが再臨なさる！しかし、またしても来られなかった。これがあの黙示録10章に描写されている再臨運動の「大失望」の経験である。

1844年10月22日
大失望後

至聖所にイエスは
入られた！
調査審判！
最後の贖い！
罪の除去！
神の十戒の重要性！
第七日安息日の真理！



- ・ その大失望の後に、彼らはなおも「聖所とは何か」「聖所の清めとは何かを追及していった。そして天の新しい契約の聖所で新しい契約の仲保者として、イエス・キリストが最後の贖いのため、「至聖所」入られたことを発見したのであった。更に契約の箱に十戒を見出し、特に第4条の安息日の戒めに光が輝いているのを見た。キリスト再臨の前の非常に重要な最後の贖い、すなわち、罪の除去という聖所の清めの働きを大祭司キリストが開始されたことが明白になって再び立ち上がったのであった。そして天の至聖所から地球最後の警告の「三天使の使命」が教会に与えられるのであった。黙示録 10 章、大争闘下 23、24 章参照。

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていく時に、新しい義務が示されるのであった。もう1つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

預言者は語っている。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあられる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁(あく)のようである。彼は銀をふきわけて清める者のよう

に座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる」(マラキ 3: 2,3)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむ時地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行われ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」(マラキ 3: 4)。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会」である(エペソ 5: 27)。また、その教会は、「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」である(雅歌 6: 10)。」大争闘下 140

図 45

再臨運動の危機と勝利

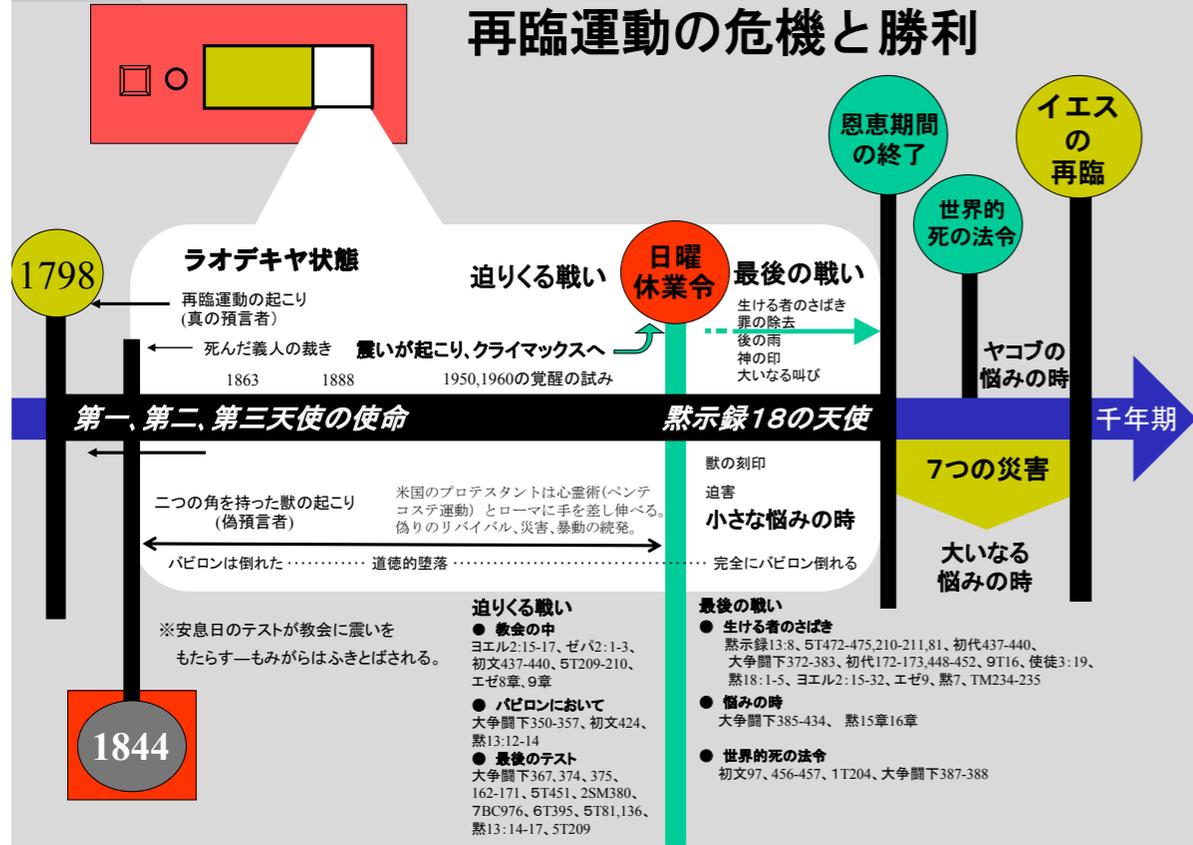


図 45 の説明

1. 歴史的研究

再臨運動の危機と勝利

焦点を最後の事件に合わせて詳しく見てみましょう。1844年から預言では「終わりの時」に入りました(ダニエル12:4)。黙示録10章にあるように、封じられた書、小さな巻物—ダニエル書が開封された時、再臨運動がアメリカで興りました。同時にその時、プロテスタントが、二つの角を持った獣として台頭していました。黙示録13章11節に「わたしはまた、他の獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った」と書かれています。詳しくは大争闘下159～参照。

よく注意して見てください。このチャートの中央を一つの太い黒い線が流れています。その上は再臨運動の歴史を表わし、下は偽預言者(小羊のような二つの角を持った獣)—すなわちプロテスタント・アメリカの興りと進展と最後の墮落を表わしています。

1844年に三天使の使命が始まりました。義人(クリスチャン)のさばきが天の聖所で始まりました。再臨運動が、神の戒めを守り、イエスの証、すなわち預言の霊を持つ民として起こったのです。

同じように1844年、プロテスタント諸教会は再臨使命を拒んだので、道徳的墮落に陥り、第二天使に言われているように、「バビロンは倒れた」のです。「大部分の教会はそれを拒否して急速に墮落してしまつた。しかし、第二天使の使命は、1844年に完全な成就を見たのではなかった。…背教の活動は、まだその頂点に達してはいない」のであります(大争闘下92)。

1844年からしばらくたって、神の民に率直なメッセージが送られました。しかし、皆のものには受け入れられませんでした。徐々にラオデキヤの状態に陥りました(1853年から)。



ジェームス・ホワイト

エレン・ホワイト



R.J. ウィーランド



D.K. ショート



E.J. ワゴンナー

A.T. ジョーンズ



M.L. アンデレアセン



福音保守派のバーンハウスと



マーチン博士

神は幾たびもご自分の民に信仰と悔い改めをもって天の聖所に入り、覚醒するように訴えられました。

- 1) まず預言者 E・G・ホワイトを通して、悔い改めが幾度も訴えられ、しきりに勧告が与えられました。
- 2) 1888年にジョーンズとワゴンナーによって「天から与えられた最も尊い」「使徒時代以来、聞いたことのない」「人間の唇から聞いたことのない」メッセージをミネアポリス世界総会で与えられました。それは後の雨をもたらし、大いなる叫びによって、「義をもって速やかに」、「いなずまのような早さ」で「わらに火をつけたような速さ」で、福音のみ業を完結させるはずのものでした。

※ 1888年の使命を拒んで後、教会は更に深刻なラオデキヤ状態に陥ります。

- 3) ウィランドとショートは、我々は 1888年のメッセージを拒んだ、再吟味して、教会として悔い改めるべきだということを訴えつづけました。

キリスト教界で教派の研究、カルト(異端、分派)の研究で有名な、福音主義派のバーンハウス博士とマーチン博士が我が教会の指導者数人と何百時間も費やして話し合った結果、わが教会の指導者たちは、50余年も教え続

けてきた再臨信仰の基礎的教理について妥協し、調整をしたのである。セブンスデー・アドベンチストは今まで、非キリスト教的な、珍奇な教えを持つ教派と非難されてきたが、ようやくキリスト教界に仲間入りしたと評された。

大半は喜んだが、これまでわが教会の神学を導いてきた、M・L・アンデレアセンは、1957年に「教理に対する質問(QD)」が出版されたことに対して嘆き、強い警告を発した。特にこれ以来「最後の贖い」「特別なあがない」という教えはなくなっていく。キリストの性質についても、これまで「キリストはアダムが墮落したあとの性質を取られた」という立場は一致していた。

しかし、それ以来「キリストはアダムが墮落する前の性質を取られた」という一般論に変わったのである。この教理は、キリスト者の完全な品性は再臨前には、不可能という異なった結論に導かれるようになる。

アドベンチスト・ライフ 1993年6月号の記事を引用しよう:「1957年に牧師会主導で『S D A 教理への質問(QD)』を発行し、聖書と E・G・ホワイトとの関係、キリストの品位(キリストの性質と誤した方がいい)、信仰による義認などの聖書主義を明確にすることで、ようやく S D A も一般キリスト教界から好意を持って受け入れられるようになった。」

図 46 の説明

民数記 23:9 「岩の頂からながめ、丘の上から見たが、これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない。」

雅歌 6:8-9 「王妃は六十人、そばめは八十人、また数しれぬおとめがいる。わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ。おとめたちは彼女を見て、さいわいな者となえ、王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見てほめた。」

セブンスデー・アドベンチストの「特別な民」であること、アイデンティティ(独自性)の喪失がここから始まりました。

5T78 「我々の唯一の安全は神の特別な民として立つことである。」

国と指導者上 30 「彼(ソロモン)はイスラエルを特選の民としたところの神へのゆるがぬ服従をしいに怠り、ますます熱心に周囲の国々の習慣に同調していった。彼は成功と栄誉ある地位に付随した誘惑に負けて、繁栄の源であられる神を忘れた。」

国と指導者上 116 「神は各時代を通じて道徳的英雄を持っておられたが、今もおヨセフ、エリヤ、ダニエルのように、自分たちが神の特選の民であることを認めるのを恥としない人々を持っておられる。神の特別の祝福は、行動する人々の働きに伴うのである。」

1. 歴史的研究

大争闘上 39 「初代のキリスト者たちは、実際、特別な民であった。」

大争闘上 247 「サタンは、神の民と世俗とをへだてている壁を取り壊すことによって、神の民に打ち勝とうと絶えず努めている。」

1T525 「神の民は、大部、特殊性を失って、そして次第に世を真似てきた。そして世と混ざることによって、徐々に多くの面において彼らに真似るようになってきた。これは神にとって不快である。神は、古代イスラエルを導かれたように、彼ら自身の心に従わないで(彼らの心は清められていないので)、あるいは彼らを神から引き離れた彼らの目に従わないで、偶像礼拝の習慣を捨て世から出るよう導かれる。何か世への執着心を減らすために起こらなくてはならない。ドレス改革は質素で、そして健康によいが、その中には十字架がある。わたしは十字架を感謝し、低くなって喜んでそれを負いたい。我々は世と結合し、十字架を見失ってしまつて、そしてキリストの目的のために苦しまない。」

4) やがて、1960年代に、プリンズミード兄弟によって聖所の覚醒メッセージがもたらされ、ウィーランドとショートが書いた「1888年の再吟味」やジョーンズとワゴンナーの書き物を信徒に配り、さばきは福

図 46 の説明

音であることを説き、至聖所のキリストの、特別な、最後のあがないの意味を明瞭に提示しました。「キリストの取られた性質」はどれほど、品性完成と関係するかが明瞭に提示されました。それは教会を大きく揺さぶりました。それは約10年間続きました。教会には実に珍奇な現象が起こりました。

5) しかし、教会は覚醒せず、それ以来二つのグループにますます色濃く分かれていきます。あがないの日の深い悔い改めの必要と主を迎えるために「今我々が持っていないもう一つの経験を持つ必要(大争闘下 396,7)」を感じ、「エルサレムの中で行われている憎むべきことに対して嘆き悲しみ」、真理を明確に理解し、新しい光に躍動する少数の者と、平和だ、無事だと「致命的な安心感」で、あがないの日の条件を果たす必要に無関心を示す大部分とに分かれ、二つのグループが発展していきます。教会には、再臨信仰の土台である聖所、預言の霊に対する疑いと不信がはびこって、そのために「さまざまな教理の風」が吹きまくり、「混乱と困惑の時」になっていきます。教会への証1巻180、181を見ると、ラオデキヤへの神の率直な証に対する反対が神の民の間に震いをもたらすのです。震いというのはただ教会から出ていくというだけでなく、(それも含まれていますが、)その背教者たちの多くのものが大いなる叫びのとき

1. 歴史的研究

に返ってくること、その代わりに今第三天使の使命を信じていると自称している者の大部分が出ていくことを知っておく必要があります(大争闘下 378)。教会の中の形式的な宗教を保つ大部分を占める者たちが震い落とされることを意味するのです。その震いはまだクライマックスに達していません。

教会内に震いをもたらすものはなんでしょう?

① 証の書に対する反対、不信
『証』に対する神の民の信仰を弱めることがサタンの計画である。続いて、我々の信仰の柱である、重要な点について、懐疑的になり、さらに、聖書を疑うようになり、それから、破滅へと下降線をたどる。一度信じた『あかし』を疑い、これを捨てると、サタンは、欺かれた者たちがそこで止まらないことを知っていて、彼らが公然とした反逆を始めるまで努力を倍加する。そしてその反逆は不治のものとなり、ついには滅亡に終わるのである。」4 T 211

② 偽りの理論
「偽りの理論が導入されて震いの時が来ると、どこにも錨をおろしてこなかったこれらの表面的な聖書の読者は、移り変わる砂のようである。彼らは、定まらない感情のおもむくままに、どんな立場にでも陥るのである。」TM 112

③ 日曜遵守令のテストによって。

図 47 キリストの功績に頼る 「ただあなただけが聖なるお方です」 黙示録15:4



図 47 の説明 1. 歴史的研究

縦の太い赤い線は日曜休業令です。永遠の運命を決定する事件です。

クライマックスは日曜休業令の時です。それは「最後のテスト」と呼ばれ、神の民の永遠の運命を決定する事件です。それまで、教会内の背教は濃く打ち込めていでしょう。「教会は今にも倒れるかのように見えるが倒れはしない。それは存続するのである。その時シオンの罪人は震われ、もみごらは尊い麦よりか分かたれる。これは大変な試練であるが、それでも起こらねばならない」(2SM 380)。

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者(原文では大部分の者)が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっていく。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般受けの側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き迷わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる。安息日遵守者が法廷に呼び出されて、信仰について答えるときに、これらの背教者たちは、サタンの最も強力な手先となって、彼らの中傷し非難する。そして、偽りの報告やあてこすりによって、彼らに対する権力者たち

の怒りをかき立てる。」大争闘下 378

その時こそ、「教会の危機と沈下が最高の時」でありま

す(5T209)。「今真理を信じていると告白している者の少数の者がつ

いには救われる。」2T445
「多くの星が暗黒に追いやられ」「偉い人は最後の働きに

にわずかしかなかったさわらない。」5T80
星というと、教会の指導者のことです。ユダヤ人が国家

として滅びたのは、指導者に頼っていたからでした。

「少数」と預言されても、悔い改めと信仰によって神に

すがる者は、誰でも救うのが愛の神のけいかくであります。ヨナがニネベに40日たったら滅ぼされると警告したが、王はじめみな悔い改めたので滅ぼされることはありませんでした。神はラオデキア教会に対する愛の警告を受け入れる者を救おうと招いています。古代イスラエルの経験は、私たちに

図 48

再臨運動の危機と勝利

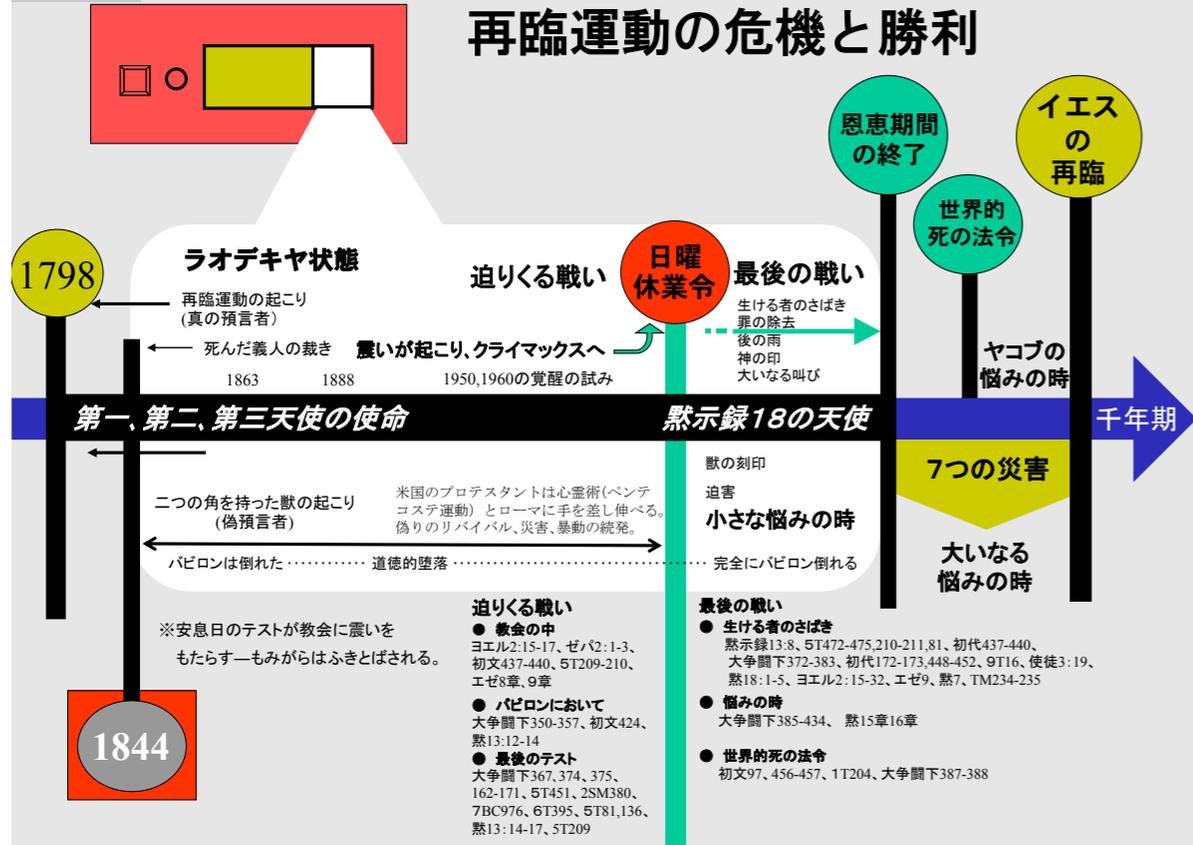


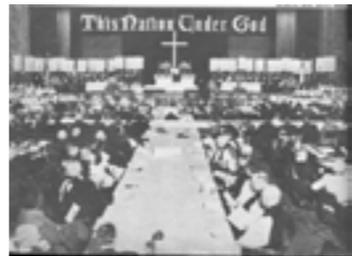
図 48 の説明

1. 歴史的研究

緑の縦線の前は「迫りくる戦い」とあり、日曜休業令から「最後の戦い」と言われています。

真ん中の横の黒い太い線の下を見てください。

この最後の危機の時に、教会内では震いが激しくなっていく一方、チャートの黒い太い線の下にあるように、バビロン(一般キリスト諸教会)においては、キリスト教一致運動(エキュメニカル運動)が盛んになっていきます。



日曜休業令が近づくにつれ、米国では三重の結合が発展する。

「合衆国の新教徒は、率先して、心霊術と手を結ぶために淵をこえて手を差し伸べる。彼らはまた、ローマの権力(カトリック)と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による

勢力下に、アメリカはローマにならって良心の権利を踏みにじるのである」(大下 350)。

世界はこの驚くべき預言の成就を見たはずです。ニューズウィーク誌は次のように報告しました。

「ホワイトハウスとバチカンとは完全な外交関係を確立した。かくして、一世紀もひそかに続けてきた求婚を完了した(成し遂げた)」(Newsweek, 1-23, 1984)。それは1984年1月10日の事でした。

心霊術は死者との交通という面だけでなく、もう一面あることを覚えていなければなりません。それは教育 269 ページを見ると唯心論であり、ヒューマニズムであることが分かります。大争闘下巻 308 ページから読むと進化論でもあり、無神論でもあります。自由、平等、博愛を主張する秘密結社(フリーメイソン)であります。(大上 350 から)それは理性礼拝であります。それは共産主義という形もとっています。この面を我々はもっと研究する必要があります。

近代心霊術の偽リバイバルの興奮が宗教界に起こります。宗教界はサタンの操る機関車によって猛スピードで滅びに向かっていることについて、大下 191、初文 176、472-7 に書いてあります。ぜひ読んでください。「心霊術はキリスト教をそっくりまねて、奇跡が行われ、病人はいやされ、否定することのできない多くの不思議が行われる」のです。続けて大争闘下巻からお読みします。

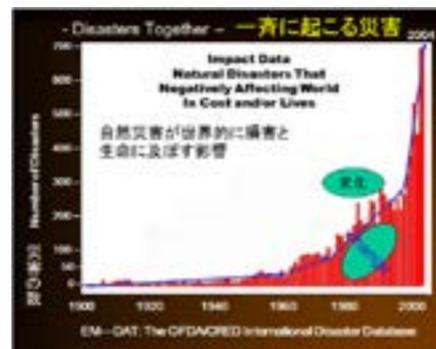
セレブレーション礼拝、メガチャーチ現象は、決して聖霊の働きではなく、「別の霊の働き」であることを覚えましょう。



「サタンは心霊術を通して人々の病気をいやし、もっと高尚な新しい信仰を提供すると称して、人類の恩人のように見せかける。だが同時に彼は破壊者として働く。…不摂生が理性を王座から追い出し、肉欲の放縦、争い、流血が続く。サタンは戦争を喜ぶ。

サタンはまた…自然力を通して働く。…ある者たちには恩恵と繁栄を与え…他の者たちには災いをもたらす…偉大な医師のように見せかけながら、他方では病気や災害を生じさせ…海や陸における事故や災害、大火災、はげしい突風、すさまじい降雹、あらし、洪水、たつまき、津波、地震などあらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。」大争闘下 351

大災害を伴う偽リバイバルは米国においてすぐ獣の像—すなわち政教一致（政治権力と教会の結合）に導かれるでしょう。アメリカを繁栄させた大原則—政教分離、信教自由が崩されるでしょう。



やがて日曜休業令を守るように強要されるでしょう。聖書の安息日をあがめるものは、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落とを引きおこし、神のさばきを地上に招くものであると攻撃されるのです。教会と国家の高官達は、すべての階級の人々に日曜日を尊重させるために、日曜遵守を強制する法律を求める大衆の要求に屈伏するのであります。宗教自由のアメリカがまず先立ってそれをするとならば全世界の国がその例に従うでしょう。このようにして全く同じ危機が世界のあらゆる地域に発展するでしょう。それまで (1) 教会内に、(2) バビロン (諸教会) にどんなことが起こるか、(3) 最後のテスト—日曜休業令の時にどんなことが起こるかを自分で調べることが出来るようにチャートの中に参照をあげておきました。

日曜休業令は迫りくる戦いと最後の戦いを区分する事件であります。我々は今迫りくる戦いの時に住んでいます。日曜遵守が法律化され強制される直前に住んでいます。黙示録 13 章の法令は、安息日を守る者達に、売ったり、買ったりすることを禁じる経済的なボイコット、殺す事さえ命じるのです。こ

れは神の民にとって最後の危機です。今起こっている小さな震いはクライマックスに達します。ここから最後の戦いに入ります。その時、神の民の大部分のものが真理から震われ、反対側に加わるでしょう (大争闘下 378)。その時、忠実な神の民は生ける神の印を受け、不忠実な者は獣の印を受けるでしょう。

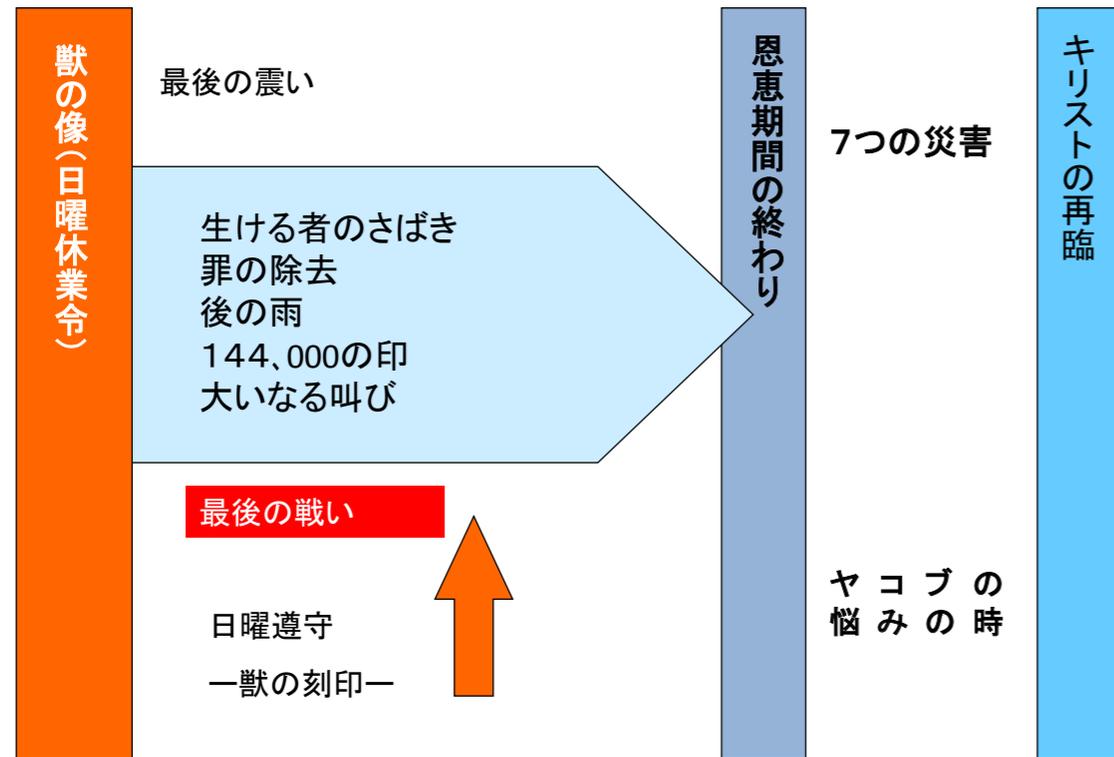
日曜休業令と共に生ける者のさばきが始まります (このことに関しては別の研究資料がある)。

黙示録 13:8 がそれを明言しています。

「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」

英語欽定訳以外はみな誤訳です。真理は「世の初めからほふられた小羊」です。世の初めから救われる人と滅びる人が定まっているわけではありません。イエス・キリストが人類を救うために自らを神の小羊としてご自身を捧げることが父なる神と決めておられたということです。人が生命の書に名が記されるのは、キリストを信じると告白するときです。

最後のテスト



日曜休業令が立つとどんなことが起こるか？

「人間の法律が神の律法の上に高められる時、この世の権力が州の第一日目を守るように人々に無理強いする時、神の働かれる時が来たことを知りなさい。」 7 BC980

「(その時) サタンの驚くべき働きがやってきたこと、また世の終わりの近いことを知るのである。」 5 T451(前途の危機 39)

1. 神の民の経験 詩篇 119:126

- ・生ける者の裁き—永遠に運命が決定される。
- ・罪が永遠に除去される(大争闘下 216-217)。
- ・後の雨によって神の道徳的な形が品性において完成される(聖霊に導かれて 308)。
- ・神の印が押される。144,000 の出現。
- ・大いなる叫びによって短期間に伝道が完成される。黙示録 18:1-5

「働き人をあっと驚かせる方法で」神の御業は完成するのです。

これは教会に最後の震いをもたらします。魂を悩ましていた神の民に大いなる変化が起こります。

「わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなかった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渴くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天の大いなる叫びである』と天使は言った。」 初代文集 440

この素晴らしい経験にあずかる者はどんな人たちでしょうか？

決して、セレブレーション、メガチャーチのプログラムは、この経験をもたらしません。聖書と証の書は、昔あがないの日に聖所に集まって魂を悩ましたイスラエル人のように、天の至聖所の大祭司イエスを仰いで魂を深く探索し、贖いの日の条件を満たす人々に成就する経験です。

2. 悪の勢力の結集

この時は、小さな悩みの時とも呼ばれます。なぜなら、この時、サタンは純潔な聖なる集団を見て、アベルに怒りを発したように、キリストの純潔を見てパリサイ人が怒ったように迫害してくるからです。

獣の印か神の印か、人間の権威に服従するか、神

の律法に服従するか、全人類が決定すると、キリストは全人類の恵みの期間の終わった事を宣言されます。それから聖所を出られ、7つの災い、すなわち、「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時が始まります(ダニエル書 12:1)。この時のことを「大いなる悩みの時」と呼んでいます。

第2、第3の災いの間に死の法令が出されます。第7の災いの時に、天から神のみ声が聞かれ、イエス・キリストの再臨の日時が知らされます。千々万々の御使いを率いて戦いに疲れた民を救出するためにおいでになるのです。栄光の王にキリストの兵士達はまみえるのです。各時代の大争闘の「大いなる悩み」「神の民の救出」の2章をぜひ一気に読んでください。この時の光景を想像のうちにとらえる時に何とも言えない感動を経験するでしょう。

3. ローマ法王教の世界支配

黙示録 13 章を見ると、ローマが再び世界支配をするために、アメリカ合衆国を用いることが明確に預言されています。17 章を見ると、ヨーロッパも「新世界秩序構築」のために手助けをすることが分かります。

大争闘下巻 321 を見ると、ローマ法王教の狙いが三つあります。第一に、再び世界を支配すること。第二は、迫害を復活させること、第三は、プロテスタントが行ったすべてのことを無効にすること(例えば、信仰による義認、聖書、聖書のみ、万人祭司、信教自由等々)です。そのために激しい決定的な戦いの準備をしている。日本相撲で息が合うのを待っているようなものです。相手の敵は準備ができていても、神の民が準備ができていません。

1991 年、湾岸戦争の時に、ブッシュ米大統領が新世界秩序を発言して以来、各大統領はますますそれを口にするようになりました。ブッシュ息子大統

領は、こう言いました：「真に偉人の一人、ヨハネ・パウロ 2 世に栄誉を与える最上の方法は、彼



の教えをまじめに受けとめ、彼の言葉を聞き、彼の言葉と教えをこのアメリカにおいて実行に移すことである。」パトリシア・ザボア、カトリックニュースサービス 2001/3/24

他国の指導者たちもそのコーラスに加わるようになりました。元イエズス会であった、マラカイ・マーチン著の「血の鍵」という本は、分厚い本ですが、ベストセラーになりました。その本の中でバチカンの計画である、ローマ・カトリックが支配する新世界秩序ということを明確にしています。

米国の豹変ぶりには驚くべきものがあります。



ローマ・法王教は米国と組んで新世界秩序、世界支配をするのです。不思議ではありませんか。ヨーロッパにおけるローマ・法王教の迫害を逃れてきたプロテスタント（小羊のような二つの角を持った獣）が、今や海から上ってきた獣と親友になって世界支配の陰謀を企てているのです。このことは、黙示録13章の預言が明らかにしています。そして米国か

ら始まって、全世界にローマ法王教の権威のしるしである日曜礼拝を強要することになるのです。そうなると、自由の国、アメリカは信教の自由を失い、真のプロテスタント、すなわち、神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒たちは、大変な迫害に遭うこととなります。これが最後の戦いであり、この戦いは全世界に及びます。

神は、この最後の戦いのために備えご自分の民を持っておられます。この民のことが、黙示録14：1-12に描写されています。神の民の最後のメッセージは、黙示録14：6-12に記されています。読んでみましょう。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』。

また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』。

ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。

ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』。

この最後の戦いにおいて誰が勝利するかが、黙示録17:14に記されています（黙示録15:2にも書いてあります）

「彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。

最後の時代の二種類の人々

今日、世界には様々な宗派、イデオロギーがありますが、どのグループにも、キリストの功績に頼る人と、自分自身の功績に頼る人がいます。キリスト教や、現代の真理について聞いてはいない人が、自分の功績に頼らず、自分以外の誰かの功績に頼ろうと光を求め、良心に従って歩んでいる人々がいます。彼らはいつか必ず、神の摂理の中で必要な真理に出会うでしょう。黙示録13章によると、この地球上のすべての人が神に従うか、人間に従うかを決定しなければならない時がやってきます。神の印を受けるか、獣の刻印を受けるかを決定する時がやってくるのです。



その時、黙示録 14:6-12 によると、神を恐れて、神の戒めを守り、イエスの信仰を守る者と恐るべき刑罰を受ける獣とその像を拝み、その刻印を受ける者たちとに分けられます。獣の刻印とは何か、それは、第一天使の使命を拒む者たちが受ける、滅びの印です。第一天使の使命は何でしょうか。

「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」です。

伝道の書 12:13 「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。」

神をおそれることは、その命令(戒め)を守ることです。

十戒のどの戒めに神の印があるのでしょうか？
第 4 条です。

出エジプト記 20:8-11 「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」



エゼキエル 20:1,20 「わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたの間のしるし(印)となっ

て、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである。」

したがって、第一天使の使命の天地万物を創造された方を礼拝するという事は、神の第 7 日安息日を遵守するという事です。これが神の印であるのに対して、サタンは、太陽礼拝(バビロンの宗教)を意味する日曜礼拝を国家権力によって強要します。その時、神の印を受けて、救われる者となるか、人間の権威に従って日曜礼拝をすることによって滅びる者になるか、どちらかを選ばなければなりません。

ローマ 1:23-25 「不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた。彼らは神の真理を変えて虚偽とし、創造者の代りに被造物を拝み、

これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アアメン。」

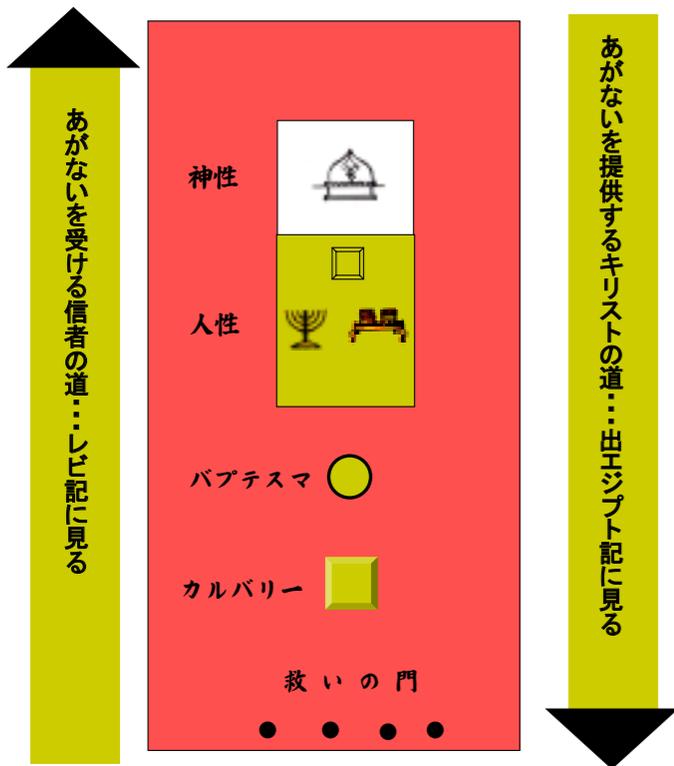
神の印を受けるということは、神に聖別されたことを意味します。信者の心は「キリスト・イエスの心を心」とするのです(ピリピ 2:5 文語体)。神の恵みの業が心に成し終えられて、花嫁なる教会は、花婿なるイエスを迎える準備ができるのです(エペソ 5:27)。大争闘下 140,141; 実物教訓 47 を参照。神に仕上げの印を押される人たちは、完全に自分の功績に頼ることから解放され、完全にイエスの功績、義のみに頼るのです。その時、彼らは「主我らの義」と呼ばれるのです。エレミヤ 23:6,33:15 参照。

その時、聖徒たちは、この地上のすべての悪の勢力が結集して迫害、戦いに突入するのです。勝利は神の小羊と聖徒たちのものとなります。黙示録 15:2、黙示録 17:14。

天の至聖所で大祭司イエス・キリストが最後の執り成しをしておられる間に起こる事件を学んできました。

日曜休業令が立つと「麦わりに火をつけたような速さで」「稲妻のような速さで」み働きは完成します。

聖所に象徴されたキリスト



キリストが提供するあがないの道

言は肉体となり我々のうちに宿った。(ヨハネ1:14、希望上7,255、教育29)

彼はご自分の神性を人性で覆われた。(ヘブル10:20)

神性と人性は一つの魂の宮で結合された。

キリストの人としての心はみ言葉(パン)、み霊(燭台)、で満たされ、絶えざる神との交わり(香)を持っていたので罪のない状態であった。人間としての品性を完全に発達させて、彼はバプテスマを受けられた。ついに、「神と人」の犠牲として十字架でご自身をささげられた。彼が死なれた時、その肉体は裂かれた(5BC1105)。

神と人間はキリストにあって一つとなった。律法の二大柱である義とあわれみがあがないにおいて結合し、キリストは救いの門を開かれた。

2. キリスト論の研究

次に、聖所を通してキリストは人類のために何をなされたかを研究いたしましょう。

クリスチャン生活の第一歩は、神が我々のために何をなされたのかを知ることです。「人は眺めることによって変わる」のです。英語で「Behold」は、眺める、見る、仰ぐ、考える、瞑想するの意があります。そこからキリスト教の信仰は始まります。信仰すれば、自分にどんなご利益があるだろうかということから始まりません。

ヨハネ第一の手紙 3:1「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。」

聖所はキリスト教の歴史に光を投げかけているばかりでなく、救い主キリストのあがないの働きに大

きな光を投げかけています。イエス・キリストが人類のために何をしてくださったか、何をしておられるか、何をなさろうとしておられるかを間違え余地のないほど単純に教えています。

モーセの幕屋は天の聖所の型であり、確かに天に真の聖所があります。しかし、ヨハネは、同時に幕屋はイエスご自身の象徴であると言っています(ヨハネ1:14、2:19-21)。「儀式のどの部分もキリストを象徴している」(各時代の希望上17)。

イエスは、「聖書は、わたしについてあかしをする」(ヨハネ5:39)と言われましたが、聖所もすべてのものが、イエス・キリストを象徴しています。

イエスは、「わたしは門である」と言われました。祭壇でささげられる朝夕の小羊の犠牲はバプテスマのヨハネが言ったように「世の罪を取り除く神の小羊」を表わしていました。洗盤は「罪を清める泉」、命の水キリストを表わしていました。燭台は「わたしは世の光である」と言われたキリスト。香壇はキ

リストの功績をさします。ご自身を「神へのかんばしい香り、ささげもの」と言われています。聖所と至聖所とを分けている幕はキリストの肉体の象徴でありました（ヘブル 10：20）。律法はキリストのご品性、シカイナーはキリストの神としての栄光を表わしていました。キリストは恵みのみ座であり、あがないであり、生けるマナ、杖、生命の書、さばき主、仲保者…等、すべてのものがキリストを象徴していました。

さて、聖所はまたキリストのあがないの方法を例証しています。1つの矢は上から下へ、もう1つは下から上へ向かっています。右側の矢に何と書いてありますか。出エジプト記にはあがないを与えるキリストの道が描かれています。順序はいつも至聖所から始まり、それから第1の部屋—聖所に移り、そして外庭へと移っています。

※ イエスは言われた、「わたしは門である」（ヨハネ 10:1,9、民 3:16）。彼は小羊である（ヨハネ

1:29）。外庭に入って罪人は白い亜麻布で囲まれたが、それはキリストの義をあらわしていた（黙 19:8、エレミヤ 23:6）。我々はキリストに結ばれるバプテスマを受けなければならない。彼こそ命の泉だからである（ガラテヤ 3:9、詩篇 36:9）。彼は聖所の実体（本質）である—かれこそ命のパン、光、香である（ヨハネ 6:35、8:12、エペソ 5:2）。幕は彼の肉体の象徴である（ヘブル 10:19）。彼の生活が律法である。なぜなら律法は彼の心にあったからである（ガラテヤ 6:2、詩篇 40：8）。

彼は哀れみの座であり、あがないである（1ヨハネ 2:2、ローマ 3:25）。彼は生きたマナであり、芽を出した若枝である（ヨハネ 6:33、イザヤ 11:11,2）。彼は命の書である（出エジプト 28:29、ヨハネ 1:1）。彼は裁き主であり、仲保者である（ヨハネ 5:22、1ヨハネ 5:22、1ヨハネ 2:1）。彼は幕屋の栄光である（ヨハネ 1:14、ヘブル 1：3）。すべての霊的祝福は彼のうちにある（エペソ 1：3）。罪のゆるしも罪の除去も、

先の雨も後の雨も。キリストは完全への道である（ヨハネ 14:6、詩篇 77:13）。